NAKED EYES SHIN TAKAMATSU

PART 2 - 1

INTERVIEW:KOUICHIRO GOSHO PHOTOGRAPH:TOSCIO TOMITA

建築家 SHIN TAKAMATSU architect

高松伸

若さの特権はひとつしかない。それは、手の届かないものを欲しがる権利だ。

島根県出身の高松は学生時代を過した京の地で創作活動を始めた。時代を越えて生息する社寺仏閣の建築との対比に於いて、近未来都市を思わせるメカニックで、幾何学的ユニークさを持つ彼のデザインは、歴史に挑戦するかの如くセンセーショナルな素材を提供し続けている。

八〇年代、そんな彼のデザインは国内外の展覧会で話題を呼び、数々の賞を受賞。その後、建築物の刺激的なデザインが周辺地域に影響力を持ち始めるようになった九〇年代に至っては、風景とハーモニーを醸し出すフォルムバリエーションも見せている。九五年アメリカ建築家協会名誉会員に認定。さらに翌年、文化庁第四六回文部大臣賞芸術選奨を受賞した。高松の喜びは、建築が芸術部門でやっと評価されたという安堵感であろう。

今も世界各地でのプロジェクトに挑んでいる高松は、京都を離れないという。

「だって、素晴らしい日本庭園が身近にたくさんあるからね。最高の空間デザインだよ。」高松の軌跡の根幹は何なのだろうか。『若さの特権はひとつしかない。それは、手の届かないものを欲しがる権利だ。』以前に高松が言い放った言葉である。彼に質問を投げかけてみた。

■湧き水の様な活力を感じるが、落ち込んだことは…。

今迄に一番落ち込んだのは母の死…。いまだに乗り越えることができません。逆にどん底の苦しみから救われたヒトコトは『伸、あなたは天才よ！』…蘇りましたね。

■底抜けに笑みが零れてくることは…。

建築の事を考えている時はいつも。美しい女性のことを考えている時はいつも。……他に無し。

■腹立たしくなることは…。

ものごとが予期したとおりに運ぶ時に憤りを感じる。『思いもかけぬ何か』が無いことにおいてね。創造は予期せぬ何かによって挑発されます。

■道形は何を求め意味しているのか。

変わり続けること、それが価値では。

■言葉でくくられると絶に触る様子だけど、ヴィジョンは。

否定的な意味ではなく、今やヴィジョンなるものを掲げて行動すること自体が無意味であると考えています。

■今まで、逆う人生を生きる自由もあるが、これからは。

創り続ける建築の連続が結果的に人生を刻めばよいと思っています。あらかじめなにかをイメージしたり、なにかを思い詰めたりすることなく、創ることや行動することの一歩一歩が、その都度不思議な世界を開くように（このことを大切にしたい。）

■そんな生き方を『ヒトコト』で言うと？

積極的な刹那。

■目の醒める『ヒトコト』を。

――美人だ!!……!?

（……!?（笑）ウーム予期せぬヒトコト。）

忙殺さながらの高松に転地療養を勧めたが、その療法は我々にこそ必要なのであろう。科学技術も経済発展もそれだけでは自分達を幸福にしてくれないことに気づいているのに、従来の価値観で計ろうとする。ついつい曖昧に幸せというものを追い求めてしまう。不幸の条件を取り去ってみても永久に幸福になれるものではない。価値からの創造は崩壊し、只々、創造の連続の中に価値観は生み出され、消えて行くと浮んだ。（敬称略）　文◎五所光一郎